

## 「耶律鑄夫妻墓誌銘」録文と訓読

徳永 洋介

はじめに

1998年秋、頤和園の文物保存庫建設の工事中に耶律鑄夫妻の墓が発見され、その墓誌が出土した。いうまでもなく、耶律鑄は耶律楚材の子であり、自身もクビライ政権の中書左丞相の地位まで進んだ人物である。その行動についてとかくの評判はあるにせよ、これほど著名な元朝高官の墓誌が出土することは稀であり、そもそもこの人物に関わる碑誌類の存在自体が疑われていただけに、史料的価値の高さが期待されたが、その拓影が公開されることはなかった。ところが、過日出版された『北京市文物研究所蔵墓誌拓片』（北京市文物研究所編、北京燕山出版社、2003年）に、管見の限りではその拓影が初めて掲載された。そこで本科学研究費補助金の研究班では、2004年5月8日に京都大学文学研究科ユーラシア文化研究センターで開催された研究集会において、同書掲載の拓影に検討を加えた。今回掲載するのは、当日の講読を担当した徳永が、本研究班の構成員以外をも含む参加者から提示された意見を参照しつつ、あらためて録文と訓読を作成し、必要な部分に簡略な注記を加えたものである。なお、その後刊行された『北京文物精粹大系・石刻卷』（北京出版社、2004年）にも拓影が掲載されているが、印刷は不鮮明で、何らかの書物からの複写と思われる。

この墓誌に関する関連文献は、以下のとおりである。また耶律鑄については、『元史』所載の伝のほか、岩村忍「耶律鑄」（『蒙古史雑考』白林書院、1943年）、あるいは杉山正明『耶律楚材とその時代』（白帝社、1996年）を参照されたい。

耶律鑄墓誌関係文献

「耶律鑄夫婦合葬墓簡況」『北京文博』1998-4

「耶律鑄夫妻合葬墓出土珍貴文物」『中国文物報』1999年1月31日

「五十年北京地区発現的重要文字石刻」（呉文・傅幸）『北京文博』2000-1

「《元中書左丞相耶律夫婦合葬墓出土文物展》巡礼」（王丹・王策）『北京文博』2000-4

「頤和園耶律楚材祠六一重新開門迎客」『北京日報』2003年5月30日

録文凡例

- 1 この録文は、上記のごとく『北京市文物研究所蔵墓誌拓片』所載の拓影に基づくものである。
- 2 録文中で、□で示したものは、文意によって文字を補った箇所、\*は判読不明の箇所、文字の右の？は疑問が残る箇所をそれぞれ示す。
- 3 印刷上の事情から、漢字は原則として常用漢字を用いた。

- 01 大元故光祿大夫監修國史中書左丞相耶律公墓誌銘
- 02 公諱鑄字成仲遠太祖長子東丹王九世孫王諱曰突欲生燕京留守政事令婁國婁國生將軍國隱國隱
- 03 生太師合魯合魯生太師胡篤胡篤生定遠大將軍內刺生銀青榮祿大夫興平軍節度使德元德元
- 04 弟聿魯生正議大夫尚書右丞祖考履迺興平公以為子遂承其後諡曰文獻公文獻公生中書令楚材字
- 05 晉卿中書令及漆水國夫人蘇氏從
- 06 車駕西征至于西域\*\*\*\*辛巳年五月初三日公生既成童從學于九山李先生子微博聞強記文
- 07 筆為天下之冠自号雙溪\*\*\*\*行于世及長又能通諸國語精敏絕倫
- 08 天后朝嗣領中書省事年纔二十有三中統元年公在六盤山夏會有變屬從者皆從之唯公棄其妻子挺
- 09 身逃歸
- 10 上大喜詔曰慶承相種學冠\*\*\*\*振家聲雅知朝政蓋為臣無以有已而憂國常忘其家矧遵閱之先
- 11 猷宜正君臣之大義可特授中書左丞相至元年八月加光祿大夫中書左丞相如故四年六月改榮祿
- 12 大夫平章政事五年九月復拜光祿大夫中書左丞相公每在朝竭誠盡忠經綸庶政以治民為己任十年
- 13 十一月遷光祿大夫平章軍國重事十三年六月詔公可監修國史余如故
- 14 朝廷凡有大事必諮訪焉十九年冬十月又拜光祿大夫監修國史中書左丞相二十二年四月十二日甲
- 15 寅以疾薨享年六十有五\*\*\*\*祖宗以來皆以禮薄葬糜財單幣腐于地下誠無益于亡者使其無
- 16 可欲或後世誤為人所動\*\*\*\*君子能掩之者諸子泣奉命是年七月十五日乙酉葬于瓮山之陽中
- 17 書令之兆次禮也夫人七人粘合氏中書公之女也里可溫真氏赤帖吉真氏雪尼真氏奇渥溫真氏二人
- 18 瓮吉刺真氏子十二人長曰希徵中順大夫濠州鎮守萬戶次希勃三十一歲而卒次道道早卒次希亮嘉
- 19 議大夫吏部尚書次希寬\*\*\*\*王位下奉 御次希素既娶而卒次希周嘉議大夫左侍儀奉 御兼修起
- 20 居注次希光奉訓大夫員\*\*\*\*治中次希逸嘉議大夫山東東西道提刑按察使次希援次希崇次希晟粘
- 21 合氏生道道赤帖吉真氏生希亮希素希光希逸奇渥溫真氏生希援希崇希晟女六人長適行中書省左
- 22 丞汪惟正次適興元\*\*\*\*已適人矣孫男十三人孫女十四人將葬尚書公等使來請銘於天民天
- 23 民公門\*\*\*\*盛德其何敢辭嗚呼公之功勳事業始則布于民心終則著于史策於茲不
- 24 \*\*\*\*而具其始末為之誌云銘曰
- 25 \*\*\*\*慶門 有賢有哲 令子令孫 以及於公 名高位尊
- 26 \*\*\*\*克敦 嗟乎終哉 耐于英魂 埋石壙前 以圖永存
- 27 至元二十二年七月十五日立石

(行41字)

## 【訓読】

故中書左丞相耶律公墓誌銘（篆額）

大元故光祿大夫・監修国史・中書左丞相耶律公墓誌銘

公、諱は鏐、字は成仲。遼太祖の長子、東丹王の九世の孫なり。王、諱を突欲と曰い、燕京留守・政事令婁国を生む。婁国は將軍国隱を生む。国隱は太師合魯を生む。合魯は太師胡篤を生む。胡篤は定遠大將軍内刺を生む。内刺は銀青榮祿大夫・興平軍節度使徳元を生む。徳元の弟、聿魯は正議大夫・尚書右丞・祖考の履を生む。迺ち興平公以て子と為し、遂にその後を承けしむ。諡を文献公と曰う。文献公は中書令楚材、字は晋卿を生む。中書令及び漆水国夫人蘇氏、車駕の西征に従いて西域に至り、……。辛巳の年(1221)五月初三日、公生まる。既に成童し、九山の李先生子微に従学す。博聞強記にして、文筆は天下の冠為り。自ら雙溪と号し、……世に行わる。長ずるに及び、又た能く諸の国語に通じ、精敏絶倫たり。天后朝、中書省事を嗣領するも、年は纔かに二十有三なり。中統元年(1260)、公、六盤山の夏会に在りしとき、変あり。扈從せし者、皆なこれに従うも、唯だ公のみその妻子を棄て、身を挺して逃れ帰れり。上、大いに喜び、詔して曰わく、慶承相種、学は\*\*に冠たり。\*は家声を振わし、雅より朝政を知る。蓋し臣為りて以て己を有するなく、しかも国を憂い、常にその家を忘るればなり。矧んや、閔閔の先猷に遵わんには、宜しく君臣の大義を正すべく、特に中書左丞相を授くべし、と。至元元年(1264)八月、光祿大夫を加えらるるも、中書左丞相は故の如し。四年(1267)六月、榮祿大夫・平章政事に改めらる。五年(1268)九月、復び光祿大夫・中書左丞相に拜せらる。公、毎に朝に在りては、誠を竭くし忠を尽くし、庶政を経綸するに、治民を以て己れが任と為す。十年(1273)十一月、光祿大夫・平章軍国重事に遷る。十三年(1276)六月、公に詔して監修国史たるべく、余は故の如し。朝廷に凡そ大事あらば、必ず諮訪す。十九年(1282)冬十月、又た光祿大夫・監修国史・中書左丞相に拜せらる。二十二年(1285)四月十二日甲寅、疾を以て薨る。享年、六十有五なり。……祖宗以来、皆な礼を以て薄葬す。糜財单幣の地下に腐りしは、誠に亡者に益なし。その中をして欲すべきなからしむれば、或し後世に誤りて人の動かす所と為るとも、……君子の能くこれを掩う者あらん、と。諸子、泣して命を奉ず。この年の七月十五日乙酉、瓮山の陽、中書令の兆次に葬りしは、礼なり。夫人は七人あり。粘合氏、中書公の女なり。也里可温真氏。赤帖吉真氏。雪尼真氏。奇渥温真氏二人。瓮吉刺真氏。子は十二人あり。長を希徴と曰う、中順大夫・滁州鎮守萬戸たり。次は希勃、三十一歳にして卒す。次は道道、早に卒す。次は希亮、嘉議大夫・吏部尚書たり。次は希寛、\*\*王位下に奉御たり。次は希素、既に娶りて卒す。次は希周、嘉議大夫・左侍儀奉御・兼修起居注たり。次は希光、奉訓大夫・員\*\*治中たり。次は希逸、嘉議大夫・山東東西道提刑按察使たり。次は希援。次は希崇。次は希晟。粘合氏は道道を生み、赤帖吉真氏は、希亮・希素・希光・希逸を生み、奇渥温真氏は希援・希崇・希晟を生む。女は六人あり。長は行中書省左丞汪惟正に適ぎ、次は興元……に適ぎ、…は已に人に適げり。孫男は十三人、孫女十四人あり。まさに葬らんとせしに、尚書公等の使来りて天民に銘せんことを請う。天民、…公門……盛徳、それ何ぞ敢えて辞さんや。嗚呼、公の功勲・事業、始めは則ち民心に布かれ、終りは則ち史策に著す。茲こにおいて、……その始末を具え、これが誌を為るとしか云う。銘に曰わく、

……慶門、賢あり、哲あり、令子令孫、以て公に及ぶまで、名は高く位は尊し。  
……克敦、ああ、終りなるかな。英魂を耐り、石を壙前に埋め、以て永存を図る。

至元二十二年七月十五日立石

【補注】

- 02 遼太祖長子東丹王：缺字の部分は、元好問「尚書右丞耶律公神道碑」（蘇天爵『国朝文類』卷57）、宋子貞「中書令耶律公神道碑」（『国朝文類』卷57）により補う。
- 03 太師胡篤：元好問「尚書右丞耶律公神道碑」と宋子貞「中書令耶律公神道碑」にもとづく。
- 04 尚書右丞相考履：耶律履（1130～91）、字は履道。金章宗の明昌元年（1190）に尚書右丞となる。なお実父の聿魯は、嚴密には興平公内刺の族弟にあたる（『金史』卷95、移刺履伝、元好問「尚書右丞耶律公神道碑」）。
- 05 中書令及漆水国夫人蘇氏：宋子貞「中書令耶律公神道碑」には、漆水国夫人蘇氏を楚材と同じ墓所に埋葬したことに触れ、「蘇氏、東坡先生四世孫、威州刺史公弼之女、生子鑄。今為中書左丞相」と記す。
- 06a 車駕西征：チンギスの西征は己卯の年（1219）に始まっており、辛巳の年（1221）はその3年目にあたる。かつて王国維が考証したとおり（「耶律文正公年譜」）、この記述は、楚材の中央アジア滞在中に耶律鑄が出生した事実を裏付けてくれる。
- 06b 李先生子微：李微、子微は字。九山居士の称をもち、楚材の墓誌（蘇天爵『国朝名臣事略』卷5、中書耶律文正王に逸文がある）のほか、楚材の詩集『湛然居士文集』14巻の後序の撰者としても知られる。オゴデイの五年（1233）、元好問が開封陥落直後に楚材に宛てて送った書簡のなかで推薦した金朝人士のひとり「雲中（大同）の李微」と同一の人物であると推察される（『元遺山文集』卷39、寄中書耶律公書）。
- 07 自号雙溪\*\*\*行于世：耶律鑄の文集としては、現行の『雙溪醉隱集』6巻のほか、年少期の詩を集めた『雙溪小稿』が知られていることから（『四庫提要』卷166、別集類）、この部分は「自号雙溪、有文集行于世」という方向で解してよからう。
- 08a 天后朝、嗣領中書省事、年纔二十有三：『元史』卷146、耶律鑄伝に、「楚材薨、嗣領中書省事、時年二十三」とあるのにもとづく。ただしその年月については、王国維の「年譜」以来、甲辰の年（1244）とするのが通説とされてきたが、正しくは六皇后乃馬真氏（ドレゲネ）の称制2年目にあたる癸卯の年（1243）と見るべきであろう（藤枝晃『征服王朝』秋田屋、1948年、83頁）。
- 08b 公在六盤山夏会有変：アリクブケ派の渾都海（クンドゥカイ）らが六盤山でクビライに叛旗をひるがえした事件をさす（『元史』卷4、世祖紀1、中統元年六月戊戌ほか）。『元史』耶律鑄伝に、「乙未（己未の誤り）、憲宗崩、阿里不哥叛、鑄棄妻子、挺身自朔方来帰。世祖嘉其忠、即日召見、賞賜優厚」と記すほか、同書卷180、耶律希亮伝や危素「故翰林学士……耶律公神道碑」（『危太僕文統集』卷2）にも詳しい記述がある。
- 10 慶丞相挿：この部分、意味が判然としない。
- 11 中書左丞相：『元史』の本伝のほか、同書卷4、世祖紀1、中統二年六月戊午によ

- る。
- 12 五年九月、復<sup>拜</sup>光祿大夫・中書左丞相：『元史』耶律鑄伝にもとづく。
- 13 十年十一月、遷光祿大夫・平章軍<sup>国</sup>重事：『元史』卷8、世祖紀5では、至元十年三月癸酉に、「以前中書左丞相耶律鑄平章軍国重事、中書左丞張惠為中書右丞」と記す。
- 14 <sup>十九</sup>年冬十月、又拜光祿大夫・監修国史・中書左丞相：『元史』卷12、世祖紀9、至元十九年冬十月辛卯。なお同書の耶律鑄伝には、これに続けて、「二十年冬十月、坐不納職印、妄奏東平人聚謀為逆、間諜幕僚、及党罪囚阿里沙、遂罷免、仍没其家貲之半、徙居山後」と付け加えている。
- 15 祖宗以来：この部分から16行目の「君子能掩之者」に至るくあたりは、耶律鑄の遺命を伝えるものとみなすべきであろう。
- 17 <sup>粘</sup>合氏、中書公之女：中書公とは、女真貴族の粘合重山をさす。オゴデイのとき、右丞相の楚材と並んで中書左丞相の任にあった（『元史』卷146、粘合重山伝）。
- 18 長<sup>曰</sup>希<sup>徽</sup>：「曰希」の二字は、宋子貞「中書令耶律公神道碑」により補う。
- 21a 赤帖吉<sup>真</sup>氏、<sup>生</sup>希<sup>亮</sup>・希素・希光・希逸：『元史』卷180、耶律希亮伝には、「初、六皇后命赤帖吉氏婦鑄、生希亮於和林南之涼樓、曰秃忽思、六皇后遂以其地名之」と伝える（危素「故翰林学士……耶律公神道碑」もほぼ同じ）。
- 21b 希援・希崇・希晟：宋子貞「中書令耶律公神道碑」ではこの三子の名を缺くが、この記述によって、その名前のみならず、いずれも奇渥温氏（キヤト氏）の所生であると分かる。もっとも、『元史』の本伝には、「子十一人。希徽、希勃、希亮、希寛、希素、希固、希周、希光、希逸淮東宣慰使、余失其名」として、他の史料には見えない「希固」という名が挙げられている。杉山氏の前掲書に掲げる系図（4頁）では、程鉅夫『雪樓集』卷9、秦国文靖公神道碑に、「女一、適荆湖北道宣慰副使耶律希図、中書左丞相鑄之子也」とある「希図」とともに、これまで名の分からなかった三子のうちの二名に比定しているが、希固は希図と同じ人物の疑いもあり、後考を俟ちたい。
- 22a 汪惟正：字は公理、諡は貞肅。『元史』卷155の伝に、「(至元)十七年、遷龍虎衛上將軍・中書左丞、行秦蜀中書省事、賜玉帶。……二十二年、改授陝西行中書省左丞」とあるほか、吳景山『西北民族碑文』（甘肅人民出版社、2001年）に収める隴西県元貞肅公汪公神道碑にも、「(汪維正)先娶石抹氏、卒。憲宗以故丞相耶律鑄長女為配、順以上<sup>事</sup>上、<sup>慈</sup>以<sup>及</sup>下邦、人称其婦道焉」として、この部分とあい補う記述がある。
- 22b 尚書公：耶律希亮のこと。もっとも、至元十七年(1280)以降は足疾を理由に20年あまり公務から退いていた（『元史』卷180、本伝）。
- 22c 天民：趙天民のことと判断される。王惲『秋澗先生大全集』卷73、題跋、宋広平梅花賦落語に、「至元癸巳(1293)春、予待詔闕下、秘書郎趙天民來謁。趙之父、故中書門客也」とあることからみて、耶律鑄の門客だった父親の縁で彼はこの墓誌銘を依頼されたらしい。

故郡／主夫／人奇／渥溫／氏墓／誌銘（題額）

- 01 故光祿大夫中書左丞相監修國史耶律公郡主夫人墓誌  
郡主夫人姓奇渥溫氏小字瑣真  
02 斡真大王女孫 捏木兒因大王幼女  
03 塔察兒大王從妹也中統之初有渾都海者起亂於西土  
04 中書公遂捐棄妻子挺身來歸  
05 主上以公忠於王室憂勞甚厚未幾  
06 東蕃王塔察兒奉  
07 旨以郡主下嫁於公當是時也郡主甫及笄年其治家處身  
08 之道一用漢人之法未嘗以富貴驕人又能以禮自防至於  
09 助宗廟之祭則一其誠接夫家之親唯恐其後謁然有勤  
10 儉之稱而無妬忌之行故中外欣欣人無間言雖前史所載  
11 勤於婦道者亦何以加焉易曰女正位乎內男正位乎外豈  
12 非得正內之躰乎嗚呼天不假年享年三十有三以疾終于  
13 室寃庚辰三月之六日也有子三人長曰希援娶銳吉刺氏  
14 次曰希崇娶安氏次曰希晟女孫曰久安謹卜於至元二十  
15 二年秋七月十五日与  
16 中書耶律公合葬於大都昌平泉瓮山先塋之次禮也既葬  
17 諸子泣且念曰母氏聖善不愧古人自惟幼弱敢忘於孝願  
18 紀諸石用傳不朽託子為文以記之予嘉其孝子之心不可  
19 違也敬係之以辭曰  
20 維夫人之生兮實為  
21 王室之親爰及歸於公兮亦能以貴下人既無險詖私謁之  
22 心兮足以繼古人之芳塵噫皇天輔於有德兮不及於身  
23 而必及於子孫也  
24 至元二十二年七月 十五日誌  
25 山東進士馬利用撰  
26

（行 23 字）

### 【訓読】

故郡主夫人奇渥温氏墓誌銘（題額）

故光祿大夫・中書左丞相・監修国史耶律公郡主夫人墓誌

郡主夫人、姓は奇渥温氏、小字は瑣真。斡真大王の女孫、捏木児圖大王の幼女にして、塔察児大王の従妹なり。中統の初め、渾都海なる者、乱を西土にて起こせしとき、中書公、遂に妻子を捐棄し、身を挺して来帰す。主上、公の王室に忠なるを以て、憂勞すること甚だ厚し。いまだいくばくならざるに、東蕃(藩)の王塔察児、旨を奉じて郡主を以て公に下嫁せしむ。この時に当るや、郡主、甫めて笄年に及ぶ。その家を治め身を処するの道は、一に漢人の法を用てし、いまだ嘗て富貴を以て人に驕らず、又た能く礼を以て自ら防ぐ。宗廟の祭を助くるに至りては、則ち一にその誠を尽くし、夫家の親に接しては、唯だその謁に後るるを恐る。然らば勤儉の称ありて、妬忌の行いなし。故に中外欣欣として、人の間言するなし。前史に載する所の婦道に勤むる者と雖も、亦た何をか以てこれに加えん。易に曰わく、「女は位を内に正し、男は位を外に正す」と。豈に内に正す躰を得るものにあらざらんか。嗚呼、天は仮年せず。享年、三十有三にして、疾を以て室に終る。寔に庚辰(1280)三月の六日なり。子三人あり。長を希援と曰い、瓮吉刺氏を娶る。次を希崇と曰い、安氏を娶る。次を希晟と曰う。女孫を久安と曰う。謹んでトして至元二十二年(1285)秋七月十五日において、中書耶律公と与に大都昌平県瓮山なる先塋の次に合葬せしは、礼なり。既に葬るや、諸子泣して且つ念じて曰わく、母氏の聖善は古人に愧じず。自ら惟れ幼弱なれど、敢えて孝を忘れんや。願わくば諸れを石に紀し、用て不朽に伝えん、と。予に託して文を為り、以てこれを記さしめんとす。予、その孝子の心、違ふべからざるを嘉せるなり。敬みてこれに係くるに辞を以てして曰わく、維れ夫人の生るるや、実に王室の親為り。爰に公に帰するに及びては、亦た能く貴を以て人に下る。既に陰諛私謁の心なければ、以て古人の芳塵を継ぐに足る。噫、皇天、有徳を輔くるに、身に及ばざれば、必ず子孫に及ぶなり、と。

至元二十二年(1285)七月十五日、誌す。

山東の進士馬利用撰

### 【補注】

- 03 斡真大王:チンギスの弟、テムゲオッチギン。その子の捏木児圖(ネムルト)については、『元史』巻107、宗室世系表にも見あたらず、不詳。
- 04a 塔察児大王:オッチギンの嫡孫タガチャル。7行目の「東蕃王」とは、彼が率いる東方三王家をさすものと思われる。
- 04b 中統之初有渾都海者起乱於西土:渾都海の一件は、耶律鑄墓誌銘の該当箇所を参照。
- 12 『易経』下経・家人の彖伝。
- 26 山東進士馬利用:馬利用なる人物については定かではない。

(とくなが ようすけ 富山大学)